

『トム・ジョウズ』に於ける愛と結婚について(2)

雲 島 悦 郎 *

要 旨

捨て子でありながら地主オールワージーの養子になったトムは、地主ウェスタンの一人娘ソファイアとは幼馴染であり、子供の頃よりお互いの長所を認め合う仲である。彼らが成長してから、最初に相手に対する自分の恋心に気付くのはソファイアであるが、トムは既に恋人が別にいるので彼女の気持ちには最初は気付かない。大体、元は捨て子の身のトムにとってソファイアとの恋愛など思いもよらぬことであった。しかし、そのトムもソファイアの自分に対する気持ちに気付くと、前々から素晴らしい女性と思って尊敬していたソファイアを愛さずにはいられなくなる。しかし、二人の思いが周囲に知れると、案の定、身分の違い故に猛烈な反対に会い、二人は引き裂かれる。

養家を放逐されたトムはソファイアとの恋を一旦諦めたこともあって、ロンドンに向かう途中やロンドンに出てから次々と他の女性と関係を持つ。そして彼はそのような性的放縦と無分別のせいで、幼い頃より周りの者に噂された通りに縛り首になる一歩手前までいくが、彼の日頃の善行のお蔭もあり危機から救われる。そして、彼が実は地主オールワージーの甥であり、彼が邸を放逐されたり、縛り首の危機に直面したりしたのも、実は異父弟のブリフィルの姦計によるものだということが判明し、俄かにオールワージー家の相続人になると、周囲の者は一転してトムとソファイアの結婚を望むようになる。しかし、皮肉なことに、ソファイアはトムの性的放縦故にトムとの結婚を断固拒否する姿勢を見せる。けれども、彼女はトムの人間的長所を良く承知しており、しかも彼を深く愛していたので、彼が深く反省していることを知って彼の過ちを許し結婚に同意する。そしてその翌日、彼らの結婚式はロンドンでひっそりと行われる。

目 次

はじめに

1. 愛と結婚(概観)

1-1 愛—体と心

1-2 財産・便宜・利益

1-3 駆け落ち—利己主義と盗み

(以上前号, 以下本号)

2. トムとソファイアの恋と結婚

おわりに

2. トムとソファイアの恋と結婚

サマーセット州内屈指の資産家である地主オールワージーが、ある特殊な用件でロンドンに出て、丸三ヶ月家を留守にした後、ある晩遅く帰宅して、食事を済ませたあと寝床に入ろうとして布団をめくると、そこに一人の赤ん坊が気持ちよさそうに眠っている。この子(捨て子)が、幸いにもオールワージーの養子にされ、養父の名をとってトマス(トム)と名づけられた本作品の主人公である。彼はやがて隣の地主ウェスタンの一人娘—しかも一人っ

子—のソファイアと愛し合う仲になり、結婚が問題になると、最初は周囲の猛反対に会い別れざるを得なくなるが、最後には祝福されてめでたく結ばれることになる。

トムとソファイアがお互いの気持ちに気付くのは、トムが二十才に、そしてソファイアが十七才になった時だけけれども、ソファイアのトムに対する愛はもっと前に芽生えていたと考えられる。そして、それは「小鳥事件」⁽¹⁾に端的にあらわれている。愛の動機が前にも述べたように尊敬感謝にあるとすると、ソファイアはその時からはっきりとトムに対して敬意と結びついた好意を持つようになっていく。

オールワージー家とウェスタン家は地所が隣接しており、トムとブリフィルとソファイアの三人は幼馴染みで一緒によく遊んだ仲である。トムがソファイアに小鳥を一羽プレゼントすると、ソファイア(凡そ十三歳)はその鳥をトミー(即ちトム)と名付けて可愛がっている。ある日、ブリフィルはソファイアにその小鳥を持たせてくれるように頼み、

* 下関市立大学教授

受け取るやいなや鳥を放してしまうと、鳥は飛んで行って少し離れた木の太枝にとまる。ソファエアが鳥の飛んで行ったのを見て悲鳴を上げると、馳せ参じたトムが、鳥を捕らえようと我が身の危険も顧みず木に登り、もう少して鳥を捕まえるところで枝が折れて下の運河に落ちる。そしてソファエアはトムの命が危険だと思ってさっきよりも何倍も大きな悲鳴を上げる。すると、ブリフィルもそれに合わせて大声で叫ぶ。幸いにも、トムは落ちた辺りが浅瀬で何事も無いが、その後直ぐに、大人たちが駆けつけてくる。そして、ブリフィルは騒動の理由を伯父に問われると、自分が鳥を逃がしたのが原因であり、鳥が自由を求めていると思ったので逃がしてやらざるを得なかったと答えて、「けれどソファエアさんがあんなに心配すると思ったら、また、鳥がどんなことになるかわかっていたら、決してあんなことはしなかったと思います。鳥を追ってあの木に登ったジョウズ君が水に落ちた時、鳥はまた飛び立って、直ぐに悪い鷹にさらわれてしまいました」⁽²⁾と付け加える。そしてソファエアは鳥の非業の最期を知って涙にくれる (IV, 3)。

このエピソードには三人の登場人物の特性が非常によく表わされており、印象的で、しばしば言及される場面である (また、この場所はこの二人にとって重要な思い出の場所になり、数年後、二人がお互いを恋しく思うとき、二人の足は自然とこちら辺りに向く)。危険をも顧みず人のために尽くそうとするトム、そして鳥のことは忘れてトムのことを案ずるソファエア。それに対して、トムが水の中に落ちたとき、トムの心配をすどころか、逃げる鳥を目で追いつその非業の最期を見届け (これはあくまでも本人の言い分)、それから遅れ馳せに、いかにもトムのことを心配しているかのように偽善的な叫び声を発し、更にソファエアの気持ちにお構いなく、残酷な「事実」を平気で彼女に告げるブリフィル (彼は伯父が重病と思われているときも、伯父の妹で自分の母であるブリジェットの死という事実を伯父に知らせる)⁽³⁾。そしてブリフィルの説明を聞いた家庭教師のスワッカムとスクウェアはブリフィルの行為を大袈裟に賞賛するけれど、ソファエアの父ウェスタンが「……わしの考えでは、娘の鳥を奪ったのは間違いだ。隣人オールワージーさんは好きなようにやればよいが、子供にあの手のことを奨励するのは絞首台に上らせるために育てるようなものだ」 (IV, 4) とむしろまともな評価を下す。オール

ワージーは、「あの子が鳥を盗んだのなら私は誰よりもさきに厳しく罰することに賛成するが、そういう意図でなかったことは明白だ」 (IV, 4) というだけで、ブリフィルが悪意からやったのではないかという、ソファエアが抱いたような疑念はオールワージーには一度も生じない。

そして、古の恋愛道の大家、オウィディウスが『恋愛術』の中で「軽き心は小事に動く」 (IV, 5) と言ったように、確かに、この日以来ソファエアはトムに対しては何か少し思いやりの気持ちを、そして反対に、ブリフィルに対しては少なからぬ嫌悪の情を抱くようになったと作者は言う。彼女は、トムが自分以外の誰の敵にもならない男であるのに対し、ブリフィルが自分の利益だけに強く執着する人間であることを若年にして見抜いており、彼女は、尊敬と軽蔑という語の意味を知るようになるやいなや、トムを尊敬し、ブリフィルを軽蔑したとも言う (VI, 5)。

それから、ソファエアは田舎を出て、三年以上叔母のウェスタン女史のところに滞在する。そして帰ってきた時、トムは二十歳でソファエアは十七歳になっている。猟を熱愛するトムはすっかり地主ウェスタンのお気に入りになって、邸にもよく出入りする。作者によれば、トムは世界でも最もハンサムな若者の一人で、ヘラクレスとアドニスの魅力を兼ね備えるそうだから (IX, 5)、近隣の全女性の間でも美男子の評判を得ている。しかし、そのトムは、ソファエアに対しては、美貌、財産、分別、愛想の良い態度ゆえに他の女性以上に敬意を示すけれど、彼女をものにしようという考えは持ち合わせない。しかし、彼女の方は、何の危険にも気付かぬうちに、トムに取り返しつかないほど心を奪われてしまっている (IV, 5)。一方、トムのソファエアに対する態度に格別変わりがなかったのは、ソファエアの魅力を感じないわけではなく、彼女の美貌は大いに気に入っていたし、その他の長所もみな尊敬していたけれども、実はトムの心も体も別の女性の虜になっていたからである。彼は男女間の愛を重視するけれども、彼の最初の恋愛は情欲が勝つとともに愛に関する誤解があった。

彼の恋愛の相手は猟番ジョージ・シーグリム (通称ブラック・ジョージ)⁽⁴⁾ の娘でモリーという。彼女は美人と思われているが、その美はソファエアとは対照的で男性的なものだとされる。肉体だけではなく精神も男性的なモリーは大胆、積極的で、ト

ムが消極的だと、自分の方から積極的に持ちかけて、相手を陥落させながらも自分が陥落したように見せる女である。彼女の父親がトムにとって悪への誘惑者であるのと同様に彼女は性的堕落への誘惑者である。トムは若い女をたらしこむことは、たとえどんなに相手の身分が低かろうとも、大それた罪と思いつつも、すっかりこの女の虜になっていく。そして女の愛情は男の感謝を生み、女の境遇は男の同情を生み、この感謝と同情が女の肉体への欲望と相俟って、彼の心中に生じさせた感情は愛と呼んでも、この語をはなはだしく損ねることにはならないだろう、と語り手は弁護の口振りではあるが、実際はそれが真実の愛とは似て非なるものであることを示唆しているのである (IV, 6)。

このモリーが妊娠したことが最初は家族に気付かれ、やがては近所の噂にもなる。そしてモリーは私生児をはらんだということで治安判事オールワージーの邸で裁かれた後、警官によって懲治監に連行されるところをトムが引き止め、もう一度オールワージー邸に彼女を連れ戻し、自分がモリーのお腹の子の父親であると告白しモリーを収監しないように頼む。この行動にはトムの誠実さと潔さが示されている (IV, 11)。そして、この段階では、トムは責任をとって一生モリーの面倒を見る覚悟である。

ソファイアの方はトムとモリーの関係を知って目が覚め、自分の愚かしさに気付いて彼のことは忘れようと努める。そして、彼に対する完全な無関心状態に戻ったかに見えたが、しかし、恋の病（この比喻は一度ならず使われる）は、次に彼に会うと以前の症状がことごとく戻る。そこで彼女はできるだけトムを避けようと決心し、叔母を訪問することを思い立った。しかし運命のいたずらか、ソファイアの落馬事故で彼女の決意は全て無に帰してしまう。

彼女が父親の意に従い、一緒に獵に出た帰り道、彼女の乗った馬が突然暴れ出し、彼女が落馬寸前になる。トムが駆け寄って、自分の馬から飛び降りて彼女の馬の手綱を取ったとき、馬が後脚で棒立ちになりソファイアを振り落とすと、トムは両腕に彼女を抱きとめるが、その結果、左腕を骨折する。その後、両者は相手のことを自分以上に心配し合うが、この事件が彼女の心に強く作用すると同時に、彼女も彼の心に深い印象を与えるのである。実を言うと、彼の方もしばらく前から彼女の魅力の抗しがたい力を意識し始めていたのである (IV, 13)。そして事故の後、トムがウェスタン邸で怪我の回復を待

つ間、ソファイアは振る舞いに細心の注意をしようと努めたにもかかわらず、それらしい様子が見えてしまうのを防げなかった。そして、彼は彼女のやさしい胸中に何かが起こっていることに気付く。彼は彼女の素晴らしさを知っていたし、彼女の姿に感嘆し才芸を崇め善良さを愛していたので、彼女に対する彼の感情は彼が知るよりもずっと強烈になり、そして彼はそんな自分の心に気付く。しかし彼にはまた、単なる同情、あるいはせいぜい尊敬の念を、もっと熱い気持ちに誤解してはいないかという疑念もわいた。とにかく、ウェスタンが娘を金持ちと結婚させる夢を捨てるはずもないし、この地主から受けた恩を仇で返すような真似をすることをオールワージーが許すはずもない。それに自分には、自分を愛し、そしてその愛のために純潔を犠牲にしたモリーがいると思って、彼はソファイアを心から払いのける。が、今度は極めて些細な一事件（オウィディウスのいう小事）が再び彼の全情熱を沸き立たせ、彼の心境に全面的変化を起こす。

トムとソファイアはお互いに直接自分の気持ちを打ち明けることはできないが、二人の恋の仲立ちの役割を果たすのが彼女の侍女オナーのお喋りとソファイアがそれまで使っていて、オナーにお古として下げ渡したマフ（女性が手を入れて温める円筒状のもの）である。特にこのマフが、「マフの中に隠れていたキューピッド」(VII, 9) という表現もあるように、二人の縁結びに重要な役割を果たす。ソファイアは、トムがオナーの前でそのマフに口づけをし、ソファイアに対する崇拜に近い念を吐いたことをオナーから聞くと、新しいマフと交換にオナーに与えた古いマフを取り戻す。そして、この事実をオナーはトムに告げる。更に、ソファイアがマフを返してもらって以来ほとんどずっとそれを腕に付けており、誰も見ていないとそれに何度もキスしたことがあることをオナーがトムに喋っている丁度そのところへウェスタンが彼を呼びにくると、彼は蒼白になって震えながら一緒にソファイアのハーブシコードの演奏を聴きにいく。そして、その後、問題の一小事件が起こる。ソファイアがハーブシコードを演奏しているとき、彼女が右腕につけていたマフが彼女の指の上に落ちて演奏が中断されると、地主ウェスタンは邪魔だとばかりにそれを暖炉に放り込む。するとソファイアが必死で炎の中からマフを取り出すので、それを目にしたトムにソファイアの気持ちが一層はっきり伝わる (V, 4)。(このマフは

彼女が後で家を出てからも物語の小道具として重要な役割を果たす。例えば、アプトンの宿屋でトムがウォーターズ夫人と同衾したことを知ったソファイアはこのマフを宿の女中に頼んでトムのベッドの上に置かせる。また、トムはこのマフばかりではなくソファイアが使った乗馬用の鞍にも一種のフェティシズムのような愛着を示す。のちにトムはソファイアが落とした金色の手帳も手に入れるが、彼女のマフとか彼女の使った鞍が彼女の肉体を象徴するものであるなら、⁽⁵⁾銀行手形の入った彼女の手帳は彼女の財産を象徴するとも言える。

さて、このマフの小事件はトムの心を完全に征服し虜にしてしまうが、哀れなモリーがどうなるかという不安に彼の心は千々に乱れる。ソファイアの優れた値打ちが哀れなモリーの美をかすませるが、モリーへの愛にとって代わったものは侮蔑ではなく同情である。彼は、自分はこれ程の悪党かと思いつつも、金で片が付くものならとモリーの家に別れ話をしにいき、モリーの住む屋根裏部屋で彼女と話をしているとき、有名な一事件が起こる。何かのはずみで、垂木に吊してあった絨毯が外れて、陰から哲学者スクウェアの無様な姿が「他の女性用具に混じって」——スクウェアも女性用具の一つということ——現れるのである (V, 5)。こうして、モリーがスクウェアとも関係していた事実、さらに彼女を最初に誘惑したのはウィル・バーンズという名の若者であり、彼女のお腹の子の父親はその男の可能性もあることをモリーの姉ベティー——ウィルに捨てられ妹を恨んでいる——から聞く。そして間もなく、当の男の告白ばかりではなく、ついにはモリー自身の自白によってその事実を十分に確かめると、トムはモリーに関する限りすっかり気が楽になる (V, 6)。とは言っても、モリーが孕んでいる子がトムの子ではないという保証もない筈である。⁽⁶⁾

彼の心は今や完全にソファイアの独り占めするところとなる。彼は情熱の限りを尽くして彼女を愛し、同時に彼女が自分に対して抱くやさしい感情がはっきり見えてくる。彼女と一緒にするのは無理だから、二度と彼女に会わないようにしようとして幾度決心しても、会えば全ての決心を忘れて、命がけで、更に、もっと大事なものを失っても、彼女を追い求めようと決意する。彼は自分の情熱を隠そうとするが、しかし彼女が近づいてくれば蒼くなり、それが突然だときくりとする。たまたま目が合えば血が頬に押し寄せ、顔中が赤くなり、彼女にものを言う

と、舌が必ずもつれ、彼女に触れば手が、いや全身が震える。共感があれば相手の気持ちも良く分かる。共感 (“Sympathy”) のあるところに愛は生まれがちだが (I, 10)、愛し合う者同士はその共感によって相手の気持ちが分かるという。兎も角、二人の気持ちは言葉ではなく表情や態度・仕草が伝えるのである。⁽⁷⁾ソファイアの方もやがて彼を苦しめる激しい情熱を確信すると、彼に対し先ず尊敬と憐憫の二つの感情を抱くが、更に貞淑な女性の心と矛盾しない全ての優しい感情、即ち、尊敬と感謝と憐憫が好ましい男性に対してこのような心に生じさせる全ての感情 (即ち愛情) を抱き、狂気のごとく彼に恋したのである (V, 6)。そして、ソファイアのトムへの愛の基盤には彼に対する人間的評価があるが、彼が彼女を愛するのをもまた、彼女が美人だからというだけでは決してない。彼はソファイアの美貌に触れて、パートリッジに「それはあの人の取柄の中でも最も取るに足らない点だ。分別があり善良で、どんなに褒めちぎってもあの人の長所の半分も言い尽くせない」 (VIII, 5) と言うし、ナイチンゲールには「世界で一番美しい娘だが、同時にとても高貴で気高い性質の持ち主だから、片時も忘れられない人なのに、目にするとき以外は彼女の美しさのことはほとんど思わない」 (XV, 9) と言う。しかし、これは彼の自己欺瞞に過ぎないという見方もある。⁽⁸⁾

ソファイアの叔母ウェスタン女史は「恋愛理論」 (“the Doctrine of Amour”) に通じ、人の恋愛関係は誰よりもよく知ると作者に言われるが (VI, 2)、その叔母はソファイアの意中の相手をブリフィルだと勘違いし、兄に二人の結婚をオールワージーに申し出るように勧める。そして、二人の縁談が保護者間の話し合いでまとまっていく。⁽⁹⁾順序があべこべで、保護者が保護者に子供の結婚の申し込みをしたあと、結婚の当事者の一人ブリフィルがもう一人の当事者ソファイアに求愛を開始する。オールワージーはソファイアを女性として高く評価しているから本人同士がその気なら二人の結婚に何の異論もない。ブリフィルには願ってもない話だが、ソファイアは彼を忌み嫌っているのですべて受け入れる気にはなれない。彼女は、結婚をするに当たっては自分の気持ちを大切にしたいと思うが、父親ウェスタンは財産を増やすことしか頭にないので、この親子の考え方が合うはずはない。ソファイアは親の同意がなければ結婚はできないと考えてい

るけれど、ウェスタンは娘の気持ちなどお構いなしに娘に結婚を強制しようとする。そして、ソファエアが叔母に、自分が思っている人は、叔母が考えるようにブリフィルではなく、実はトムだと打ち明けると、それはたちまちウェスタンにも伝わってしまう。そしてウェスタンは娘が勝手なことしないように彼女を部屋に監禁する。叔母は、イギリス夫人は奴隷ではなく、男と同様に自由を持つ権利があり、スペインやイタリアの人妻のように監禁してはならないと兄に注意はするが、姪は父親と一緒に家で暮らしたばかりに愛だの恋だのというロマンチックなことを覚えたと言って、姪の意思を尊重しようとは決してしない (VI, 14)。ここでソファエアが我儘でふしだらな女で、相手が無責任な男ならば、駆け落ちに走るところだが、しかし彼女はそういう手段はとらない。それは、親の権利の侵害であるとともに貞節という徳を捨てることになるからである。彼女は初な身持ちの堅い女性として描かれており、その点でも、モリーと対照的である。そしてトムも、モリーとの関係にもかかわらず、ソファエアに対しては純情で、彼がソファエアに愛を告白したとき、まるで瘡^{おこり}の発作に襲われたようにブルブル震え始めるが、ソファエアもそれと余り変わらぬ状態で、今にも倒れそうなトムが、同じく倒れそうなソファエアを支えながらお互いにふるえつつヨロヨロと歩いていく場面がある。⁽¹⁰⁾ トムは女性関係のだらしなさにもかかわらず純朴で内気な人物とされているのだ (IV, 13)。ソファエアは父を敬愛していたから、自分がこの縁組みに同意すれば父がとても喜ぶだろうと思うと、強い自虐的な感銘を受けることもある。孝心と義務との犠牲、あるいは殉教者となって自分が苦しむことを考えると、彼女はある感情が快くすぐられる気がすることもあった。⁽¹¹⁾ しかし、ソファエアは父親の権利等を尊重しながらも自分の気持ちを大切にするには、一時的に家を出るしかないと判断して、父親が彼女とブリフィルの結婚式を翌日にも強行しようとしていることを知ると、その直前、深夜に家出を実行に移す。

トムは「捨て子」の身に生まれたおかげで、幼い頃より、世間の中傷に曝されている。そして作品中の最大の悪漢、ブリフィルに隙を見せたばかりに彼の讒訴に会い、オールワージーの邸、楽園館 (“Paradise Hall”) から追放されてしまう (ブリフィルは楽園に侵入した蛇であり、その姦計によりトムは楽園を追放されるという解釈もできる)。⁽¹²⁾

ただ一人の味方ソファエアの許を去るのを一時躊躇するが、愛しいソファエアの身の破滅を招くようなことをして己の思いを遂げようという下心で泥棒のように田舎に忍んでいるのを潔しとせず、船乗りにもなろうと最初は考えて田舎を出る。当時、家柄・身分の違う者同士の結婚はただでも難しかったが、男の方が身分が低い場合は一層問題があるとされた。⁽¹³⁾ そして作者もトム自身もそのような考え方を否定しないし、トムはそれに逆らおうとはしない。⁽¹⁴⁾ トムは邸を出てからジャコバイトの反乱 (1745年) の鎮圧軍に加わったりした後でロンドンに向かう。ソファエアもロンドンに住む親戚の女性ベラストン夫人の許に走る。父親はてっきり二人が駆け落ちをしたと思いこみ娘のあとを追い、ここに擬似的な駆け落ちとその追跡が行われることになる。ソファエアはアプトンの宿で追っ手に追いつかれそうになって、更に馬で逃げて行くとき、これまた夫から逃げて追われる身の従姉のフィッツパトリック夫人と出会う。⁽¹⁵⁾ 傑作にも、ウェスタンは娘を追う途中で狩猟の現場を目撃すると、習性の恐ろしさ故か、つつい狩猟に加わって一緒に獲物を追ってしまい、その後、娘を追うのを止めて一旦帰郷する。

フィールドングの作品の主人公は大抵、非の打ち所のないような人物ではなく、欠点を併せ持つ人物として描かれる。トムも善良さの美德など種々の長所を持つが、同時に無分別という短所を併せ持つ。人は無分別によって、世間に対して重罪を犯さないにしても、自分にとって重罪人となると作者は言う (XVII, 1)。このように分別には自己に対する配慮の面があるが、この分別同様、彼にはもう一つ重大な自己に対する配慮が欠けている。善良さは慈愛 (“Charity”) と貞節 (“Chastity”) という二つの側面を持っており、そのうち、慈愛が他者に向けられるのに対し、貞節が自己に対してあるという説に従えば⁽¹⁶⁾ ——これは前述のように、女子にも男子にも当てはまると作者は言う——、トムは他者に対する慈愛の心は十二分に持ちながら、自己に対する貞節を著しく欠いているのである。そして貞節の欠如 (性的だらしなさ) と無分別の両方が彼の身を危うくしていくのである。

トムがハント夫人の求婚を断った事実に関連して述べたように (本論前編)、彼は結婚するに当たっては愛情が重要であると考えているが、彼はまた、愛情は心の問題であるのに対し、性的関係は体の問題で

あって、両者は別物だと割り切っており、肉体関係を持って相手にも愛情を抱かなければ、心に思っている人を裏切ったことにはならないと考えている(XIII, 11)。また、彼は女性の誘惑を決闘の挑戦のように捉え、それに応じないのは男の名誉にかかわると心得るし(XIII, 7)、物質的援助を受ければそれに性的に報いるのも名誉の問題と考えて、ソファイアの居所を知るためとはいえ、ベラストン夫人の囲い者のような身になり、その不名誉な状態をずるずると続ける。彼は子供の頃、ブラック・ジョージと一緒に狩園荒らしをしたかどで訴えられた時、猟番をかばったのは名誉心のはき違えのせいと周囲の者に言われるけれど、彼の名誉心が本当に誤っているのはこの女性に関する場合である——この誤った名誉心(“false Honours”)はトムだけではなくナイチンゲールにも認められる。トムの名誉心には誤ったところもあるけれども彼は決して卑劣な男ではない。そして彼は自分のソファイアに対する気持ちについて「私の愛は、相手にとって一番大切なものを犠牲にしてまで自分自身の満足を求める、そんな卑しいものではありません。私はソファイアを得るためなら何でも犠牲にしますが、ただソファイアその人を犠牲にしようとは思いません」(XIII, 7)と断言する。

トムは分別と貞操観の欠如のため次々と異なる女性と関係を持つ。ロンドンに向かう途中のアプトンの宿(ソファイアも寄ったところ)ではウォーターズ夫人と一夜のベッドを共にし、更にソファイアに会うために接近したベラストン夫人の男妾のような存在に墮してしまふ。それからベラストン夫人と手を切るために、友人ナイチンゲールの入れ知恵で彼女に手紙で擬似的求婚をする。更に、嫉妬深いフィッツパトリックに彼の妻との仲を疑われて剣を交えざるを得なくなり、相手を負傷させて捕まり投獄される。そして、例によって、藪医者¹⁷が怪我を大袈裟に見立てたために彼は自分が殺人の罪を犯してしまったのではないかと恐れる。そしてブリフィルの策謀によりトムが先に剣を抜いたと偽証する者が出て、フィッツパトリックが死ねば、彼は幼い頃より噂された通りに絞首刑になる懼れが出てくる。更に自分が肉体関係を持った女性ウォーターズ夫人が自分の母親の可能性があると知り近親相姦の罪まで犯してしまったと思い込む。こうして作者はトムを苦しめて罪の報いを受けさせるが、ただ罰を与えるだけではなく、彼に考え方の過ちを悟らせなければ

ならない。

ソファイアはベラストン夫人を頼ってロンドンに出てくるが、そこにトムが加わって三角関係のような状態になり、そのせいでソファイアはベラストン婦人に疎まれるようになり、更にこの女の計略にはまりフェラマー卿という貴族にあわや陵辱されそうになる。ベラストン夫人は、こういう手段に出てもソファイアを急いで結婚させてしまえば、世間にもれる心配はないし、ソファイアも操を奪われれば容易に結婚に同意するだろうと踏んでいる(XV, 3)。ベラストン夫人は古代のサビニーの婦人の話を持ち出して、その女性は略奪されて結婚した後、みんな相当の良妻になったと言って、最初は逡巡するフェラマー卿をけしかける(XV, 4)。そして彼が計画を実行に移した時の模様は、作者の語りよりも、後にソファイア自身によって叔母に語られた時の描写が少し具体的で生々しく、⁽¹⁷⁾それはリチャードソンの『パミラ』の主人公がB氏に襲われた模様を語るのに似ている(『パミラ』書簡15)。この時、ソファイアは父親の偶然の出現によって危ないところを救われるが、しかし今度は貴族嫌いの父親によって宿屋に連れて行かれ、そこでブリフィルとの結婚を承諾せよと迫られる。そしてそれを断固拒否すると宿屋の一室に監禁されてしまふ。トムは、まさか自由の国の女が力づくで結婚させられることはないだろうと高を括るけれど、「縁組が天で結ばれるものなら、地上の治安判事にもこれを断ち切ることはできない」というオナーの言葉にも拘わらず(XV, 7)、トムとソファイアの天国で結ばれた縁^{えにし}の糸が暴君の父親や更に叔母などによって断ち切られようとする。語り手は、ウェスタンの行動について、父親が娘を本人の意思に反して無理矢理結婚させるのは、女郎屋の女将が、罪汚れない若い女に客を取らせるようなものだ¹⁸と批判する(XVI, 2)。

トムは監禁中のソファイアへブラック・ジョージなどの手助けを得て、料理した鳥の胃の腑に納めて手紙を送り(作品中の最もロマンス的部分)、その中で、彼女が払う犠牲に対し自分が報いることができるものは、彼女に対する完璧な賛美、たゆまぬ気遣い、熱烈この上ない愛、心に響くやさしさ、相手の意志への全面的な服従しかないが、それでよければ自分の腕に飛び込んで来てほしい、相手が身一つで来ようが、世界中の富を持参しようが自分には関係ない、しかし自分を捨てる以外に父親と和解し、

心の安らぎを回復する方法がないならば、永久に自分のことは忘れてほしい、今でも自分の第一の願いは彼女がいつも最も幸せな女性であるのを見ることだと述べる (XVI, 3)。結局、ソファイアは、自由な国の女性が監禁されることを許さない叔母の取りなしで解放され (XVI, 4)、叔母の泊まっている宿へ連れて行かれるが、そこで叔母によって分別と「婚姻政治学」(“Matrimonial Politics”) についての説教を聴かされることになる。その後、ソファイアはトムに返事を書き、自分は決して父親の同意なしには重大なことで一步も踏み出さないと固く決心していることなどを告げるが、その返事を読んでトムが嬉しく思ったことの一つは、彼女が決して他の男とは結婚しないという、いつかの約束に触れていたことで、彼が自分のソファイアに対する愛の情熱をどんなに私心のないものと考えていたとしても、もし彼女が他の男と結婚したと聞いたら、たとえそれがとても良縁で最後には彼女を完全に幸福にしそうであったとしても、彼にはこの上ない悲しい知らせであったろうと作者は言う。それは、肉を絶対に離れて全く純粋に精神的な、洗練された高度のプラトニックな愛というものは、女性にしかできない芸当だと作者は考えるからである (XVI, 5)。

ソファイアは父親の攻撃をかわしても、今度は叔母とベラストン夫人から攻められる。叔母はベラストン夫人からフェラマー卿の意向を聞かされると、その話に大いに乗り気になって、財産しか取り柄のないブリフィルから貴族の称号と大きな地所を有するフェラマー卿に完全に鞍替えする。ソファイアは叔母の機嫌をとるが、しかしフェラマー卿との縁組に対する叔母の熱意を冷ますことはできないし、その熱意をさらにベラストン夫人が煽る。ベラストン夫人は、ソファイアをうまくフェラマー卿と結婚させるには、大急ぎで縁組を強引に進めて、ソファイアに考える暇を与えず、訳が分からないうちに同意せざるを得ないように仕向けるべきであり、身分ある者の結婚の半分はこのやり方で行われると言う (XVII, 8)。そして同様のヒントを与えられたフェラマー卿が彼女に再び結婚を迫ったときの二人の間に次のようなやりとりが行われる。

「……迫害する相手への愛の告白などは全て一番侮辱的な見せかけです。あなたにこのように追い求められることは私にはとても残酷な迫害です。……」

「……私はあなたの名誉と利益の他は何も考えていないのです。この体も名誉も財産も、何もかもあなたの足下に投げ出す以外、私には何の目的も希望も野心もないのです」

「その財産やその名誉をあなたが利用なさるので私は困るのです。そういうものの魅力に私の身内の者は惑わされたのですが、しかし私にはそんなものはどうでもいいのです。あなたが私の感謝を得る方法はただ一つです」

(XVII, 8)

そう言って、彼女は彼が自分を追うのを止めるなら、感謝も好意も善意も彼に捧げると告げる。だが、たかがそれだけのことで得られる感謝など薄っぺらなもので、感謝という言葉がここでは虚ろに響く。彼のような人間はたとえ感謝の対象になったとしても、尊敬や愛の対象には決してなり得ないのである (ここら辺りも『パミラ』批判になっている)。しかし、彼も墮落しきった男ではなく、彼女に結婚を約束した紳士がいるなら、つらくても引き下がるのが名誉にかなったことだと述べ、実際に彼女を追うのを断念したばかりではなく、後にはトムの釈放に手を貸すことになる。

フェラマー卿は引き下がったものの、ベラストン夫人がソファイアにトムを諦めさせようと、トムがベラストン夫人に出した求婚の手紙をソファイアに見せるために彼女の叔母に渡すと、思惑通りソファイアはその手紙を読まされる。そして、トムはソファイアから「もうあなたの名前は二度と聞きたくない」(XVI, 10) などと書いた絶縁状を受け取る。(ベラストン夫人はトムへの手紙で「私は激しく愛したのと同じくらい激しく憎悪できると」(XIV, 2) と述べるほど愛憎の強烈な人物だが、彼女が最後までトムとソファイアの恋路の邪魔をするのは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』でブービー夫人が最後までジョウゼフとファニーの結婚を阻止しようとするのに似ている。)⁽¹⁸⁾

一方、ソファイアの父親の後押しを受けるブリフィルの彼女に対する愛もすこぶる熱烈で、相手が財産を失ったとかいうような事故でもない限り弱まることのないものだったから、自分のせいでも彼女が出奔したと知っても彼の結婚の意志は変わらなかった、と作者は皮肉を込めて言う (XVI, 6)。彼が彼女との結婚で満足させようとたくらんだのは、貪欲だけではなく、憎悪という強烈な感情で、彼は結婚

とは愛か憎悪のいずれかを満足させる等しい機会を与えてくれるものと心得ていた。作者はこれに関連し、結婚している人たちのお互いに対する普段の行動から判断すると、大抵の人は結婚して心以外の全てを一つにする中で、憎悪という感情の充足のみを求めていると結論したくなるほどだと言う (XVI, 6)。ブリフィルにとって結婚への唯一の障害はオールワージーで、この地主は自分の甥がソファイアにひどく嫌われていることを知って事態を憂慮していたからである。オールワージーは結婚制度を最も神聖なものとして尊重しており、それを神聖で冒すべからざるものに保つには、結婚に先立つあらゆる用心が必要と考え、これを達成する最も確実な方法は、当事者同士の事前の愛情に結婚の基盤をおくことだと考えていたからである。ブリフィルはウェスタンが熱心に自分とソファイアの結婚を望んでいることを強調し、あんなに立派な若い女性をトムのような男の手から守るのは慈善行為でさえあると伯父を説得すると、伯父の方も、絶対的な力でソファイアの意向を変えようとするのは承知できないし、自由意志で先方が同意する気にならない限り結婚はさせないという約束で甥と共にロンドンに出掛けて来た (XVI, 6)。ブリフィルのこんな言葉に乗せられるオールワージーには母親に愛されなかった甥に対する態度の甘さが認められる。

オールワージーはロンドンに出てウェスタンに会いソファイアとブリフィルの結婚のことを話し合う。オールワージーがウェスタン家との縁組を望ましいと思うのは、何よりもソファイアの人柄に惚れ込んでいるからで、彼女は良き夫にとって貴重な宝となるに違いないと信じており、彼女のことを「第一級の天使の一人」(XVII, 3) と呼ぶ。彼女は常に男の理解力にこの上ない敬意を払うが、これは良き妻になるのに絶対欠かせない要件であるとオールワージーは思っているからだ。だが、宝石のような彼女を家に迎えたくても、盗んでまで、あるいは暴力や不正を働いてまで手に入れようとは思わないと彼女の父親に告げる。また、ブリフィルには、いやがる女も根気でものにできるなどというのは、とんでもない世間の思い違いで、ブリフィルの熱情は、彼女の美貌にとらわれ過ぎており、結婚生活の幸せの唯一の基盤である愛の名に値しないと、ブリフィルの意図を誤解した発言をする。そして、その後で、オールワージーは、「愛は愛だけの子である」(「愛は愛からのみ生まれるものだ」) と格言めいた

ことを言い、自分を憎むとはっきり分かっている相手を愛することは人間性に悖るとブリフィルを諭す (XVII, 3)。

ソファイアは、トムが種々の苦境から脱し、さらに彼の素性も分かり、ブリフィルの悪辣な企みも明らかにになり、それ故、自分の父親もオールワージーも、自分とトムの結婚を切望するようになった段階で、彼との結婚をきっぱり拒否する姿勢を見せる。オールワージーが彼女にトムとの結婚話をしに行くと、彼女は最初、ブリフィルとの縁談と勘違いし、「……どうとも思わない人と一緒に暮らすことはきっと惨めなことに違いないと思うのです。そして、愛情を捧げられないその相手にもし長所があると感じれば、多分その惨めさはさらに増すかもしれません。……」(XVIII, 9) と、いかにも彼女らしいことを言う。そこで、オールワージーはブリフィルがとんでもない悪党であったことが分かったことを説明し、彼女との縁組を実現したいという野心は捨てがたいので、別の近親の若者に会ってほしいと頼むが、彼女は結婚の申し込みなど聞くつもりはないと答える。彼女がその若者はトムであると気付かないようなので、オールワージーは事実を明かし、トムは良い夫になる良い性質があると弁護するが、彼女は、トムには長所が沢山あるものの、夫になる人として受け入れる気はないと答える。そして自分の家出について、父親の同意なしには結婚をしないと自分の確固たる主義だが、親の権威で子の意向と真反対の結婚を無理にさせるのもよいとは思わないので、そういう強制をされる気配を感じたので、それを避けるために余所に保護を求めただけだと釈明してオールワージーを感服させる。それでも、オールワージーは諦めきれず、トムを幸せにしてやりたいけれど、それができるのは彼女だけだと説得しようとする。それに対し、「現在この地上に、ジョウンズさん以上に私がきっぱりお断りしたい男の方はありません。ブリフィルさんに言い寄られる不快ささえも、まだましでしょう」(XVIII, 9) とまで言われてしまう。そして、ソファイアが何もなかったようにトムを受け入れることができないと同様に、作者もまた簡単に二人を結婚させる訳にはいかない。トムに彼の行動の非を悟らせる必要があるのだ。

トムはまだ牢獄にいる段階でも、ミラー夫人に対し、自分が地上で一番大事だと思っていたものを失ってしまったと、ソファイアに見捨てられたこと

を嘆き、自分が軽率にも悪徳行為を犯してきたことも認めるが、自分は救いがたい放蕩者ではないし、邪な人間は嫌だし、今後そういう人間と見られないようにすると誓う (XVII, 5)。更に、自分がオールワージーの甥であることが分かった段階でも、彼の口から色々反省と弁明の言葉が出てくる。曰く、「私は大変な罪人ではありましたが、凝り固まった罪人ではありません。……私は、悪辣非道な罪を犯したとは思いますが、しかしやはり、悔いても悔いきれない、恥じても恥じきれない愚行や悪行を犯したことに気がきます。その愚行がこの身に恐ろしい結果を招き、私を破滅の瀬戸際まで追いつめたのです」「……私の悪行が招いた結果で、一つだけどうしても取り返しのつかないのがあるように思います。ああ伯父上、私は宝物を失ってしまいました」「ソファイアを妻と呼べることは最大の祝福であり、今の私の幸福に天が更に付け加え得るただ一つの祝福ですが、しかしその祝福もあの人の自発的意志によるものでなければなりません」「私はあの人に対して、許される見込みのないほど罪を犯しています。そして確かに私は罪を犯したのですが、その罪が不幸なことにあの人の目には実際の十倍も罪深く映っているのです。ああ、伯父上、私の愚行は本当に取り返しがつきません……」(XVIII, 10)。彼は自分の愚行、悪行によって自分自身を傷つけただけでなく、他人、特にソファイアを傷つけたことをある程度は悟っているが、それでもまだ自分のしたことの意味が十分に分かってはいない。ミラー夫人も二人の仲立ちをしてくれるけれど、ソファイアはトム若気の過ちは許しているものの、放蕩者(“Libertine”)は嫌でたまらない、トムはとても善良だと思い、それに敬意を抱いてもいたが、放蕩な生き方は最も善良な心も墮落させるので、善良な放蕩者が期待できるのは軽蔑と嫌悪の情に多少の憐れみを混ぜてもらえるだけだ、とミラー夫人に伝えたという (XVIII, 10)。それからトムは彼女に会って自ら話す機会を得る。そこで彼がソファイアに自分は永久に許してもらえないか尋ねると、ソファイアは彼に対する公正な裁きを彼自身に期待すると答える。するとトムは公正な裁きは自分を有罪とするに決まっているので、自分が彼女に懇願するのは慈悲の心だと言う。それに対してソファイアは、アプトンのことがあった後で、彼の心が彼女のために血を流していると思っていたとき、そして彼がそんな素振りを見せていながら、別の女と新たな色恋に

耽っているとは、訳が分からない行動で、彼が公言した情熱が真剣なものとは信じられない、不実なことをそれだけやれる人と一緒になって、どんな幸せが望めるのか、と実にもっともな問い掛けをする(実は、アプトンの件については、ソファイアはベラストン夫人の家でトムに偶然会ったとき、既に一度、彼を責めたことがあり、それに対してトムは、「僕の心は決して貴女を裏切ったことはない。……僕の犯した愚行に僕の心は関係ない。その時でさえ、心は変わらず貴女のものだった。……真剣に他の女を愛することなどできなかった」[XIII, 11]などと弁明し、彼女の許しを得ている)。それに対し彼は、彼女と一緒にになれる希望がほんのかすかでもあったら、彼女以外のどんな女性にもたとえかすかでも気持ちを動かされることはなかった、本当に心の底から悔恨しているから自分を受け入れてほしいと頼む。そして二度と不実なことはしないと誓い、その証拠として、彼女を鏡のところに連れていき、「ほら見てご覧、あの美しい姿、あの顔、あの目、それからその目を通して輝いているあの心、そこに確かな保障があるじゃないか。これだけのものが手に入る男が不実な気持ちでいられるだろうか」などと言って、彼女の心を動かそうとする。そんな対話の中で彼が過去の過ちを正当化しようとして、「女性は繊細だから我々男性の粗野なところも、ある種の恋は心とは何の関係もないことも分からないのだ」とここでも体と心を切り離す論法を用いると、彼女は「私自身にはそんな妙な区別などできないし、私同様にそういう区別ができないだけの潔癖さの分からない男の人とは、決して結婚しませんわ」と彼を一蹴する。すると、トムは途端に「ぼくも分かるようになる、いやもう分かっているんだ。ぼくのソファイアをぼくの妻にできるかもしれないという希望をもった最初の瞬間に、直ぐにそれが分かったんだ。そのとき以来、他の全ての女性は、ぼくの情熱の対象でもなければ、ぼくの情欲の対象でもなくなったんだから」と答える。すると彼女は彼の考え方が変わったと納得させてくれれば一緒になってもよいと譲歩する。そして、それに必要な期間は一年くらいだと最初は言っていた彼女も段々折れてきて、最後は父親に迫られると、父親の提案に従うという形で翌日の朝、二人は結婚することになる (XVIII, 12)。(19) このようなソファイアの最後の抵抗とあつけない譲歩を不自然とする見方もあるが、女性の心理をよく表しているという見解もある。(20)

トムはこうして清純無垢なソファエアとの結婚に漕ぎ着けるが、彼がそれに値する人物かどうかについては疑問の声もある。彼が同胞愛に満ちた人間であることは間違いのないにしても、やはり女性関係はだらしがない。⁽²¹⁾ モリーとの関係は若気の至りということで、またウォーターズ夫人との関係はたった一夜のことだと大目に見ても（ソファエアもこの一件に関しては余り腹を立ててはいない）、ベラストン夫人との関係は、ソファエアに近づくためとはいえ、いや、それだからこそ、彼女の囲い者のような存在に成り下がったのは頂けない。そしてトム自身もこの夫人との関係がソファエアに知られるのを一番恐れる。ただ、彼の女性関係は、彼が誘惑したのではなく、全て女性の側から仕掛けられたものだという弁護の声もある。⁽²²⁾ 確かにトムはベラストン夫人とあのような関係を持った時点で落ちるところまで落ちるが、しかし、その後は上昇（向上）するのである。⁽²³⁾ 作者は、トムが彼を誘惑したフィッツパトリック夫人を二度と訪ねまいと決意したとき、トムの行動にはこれまで問題があったけれど、今や彼の思いの全てはソファエアに注がれているので、どんな女性も彼を不実な行為に引き込むことはできなかつたらうと言う（XVI, 9）。彼はフィッツパトリック夫人の誘惑を退けただけではなく、ハント夫人の求婚も断ったから、その点では彼の態度が改まったという見方もできる（ウォーターズ夫人の牢屋での再度の誘惑も退けたという読み方も普通である）。⁽²⁴⁾ しかし、どんな弁護をしようとも、トム自身が言うように、彼は公正な裁きを受ければ有罪に決まっている。そして、彼を最終的に許すのは、ソファエアの慈悲というよりも、彼女がずっとトムという男性に対して抱いていた異性としての熱い思いであったと言えるかもしれない。⁽²⁵⁾ だが、トムの女性遍歴については、時代によっても、社会によっても、また個人によっても色々意見・評価が分かれることだろう。

読者の意見はどうあれ、作者は当然のことながら、二人の結婚に大きな意義を認めている。トムは結婚前には色々な問題を引き起こしたが、ソファエア（「知恵」の意）⁽²⁶⁾ と一緒になることによって、人間的な成長を遂げ、本人のみならず、周りの者を幸せにしていくことを作者自身が保証するのである。

おわりに

これまで見てきたように、この作品では愛や結婚の問題が主人公達ばかりではなく、登場人物のほとんどについても触れられており、登場人物も各自の恋愛や結婚に対する考えを次々と述べる。また作者も同じようにこの問題についての自説を展開するので、本作品の最も重要なテーマは恋愛と結婚だと言っても差し支えない程である。

この作品でも、フィールディングの他の作品と同様、トムとソファエアの愛と結婚を通じて恋愛結婚の賛美が行われるが、⁽²⁷⁾ ただ『ジョウゼフ・アンドルーズ』の場合とは若干異なる面がある。『ジョウゼフ・アンドルーズ』の主人公達の結婚は田舎に帰ってから行われる。それも、結婚をあせる二人をアダムズ牧師が思いとどまらせ、結婚許可書によるのではなく、あくまでも結婚予告（banns）をした上で、教会において大勢の人に見守られながら式が挙げられるのに対し、『トム・ジョウズ』では、むしろ親など大人達の方が両人に結婚を急がせ、博士会館で結婚許可書を得て、博士会館の礼拝堂で、オールワージー、ウェスタン、ミラー夫人の三人だけの立ち会いのもとで式が内輪で挙げられる。しかも、ソファエアは、その日、一緒に食事をする者たちに自分が結婚したことを内緒にするよう希望する（けれども、その事実はミラー夫人が娘に囁いたことで次々と知れ渡ってしまっている）。

こういう違いはあるものの、この作品も結婚に関する物語に相応しく、物語の最後の方では、主人公達を含む三組の新婚カップルが一堂に会する華やかな場面もあるし、更に作品の最後の最後まで男女の愛と結婚が話題になる。物語の後日談の部分で、作者は次々と主人公以外の主だった登場人物の結婚とか愛情関係について触れる。ブリフィルはメソディストに転向したが、それは同派の大金持の寡婦と結婚したいという希望からであるし、フィッツパトリック夫人は夫と別居して、例のアイランドの貴族の夫人とは完全な親交を続け、友情を装いながら、その夫と関係が続けている。ウォーターズ夫人は田舎に帰り、オールワージーから年金をもらってサプル牧師と結婚しているし、パートリッジとモリーの間には結婚の話が進行中で、ソファエアの仲立ちでまとまりそうであるという。⁽²⁸⁾

主人公達の方は結婚の二日後に、ウェスタンおよ

びオールワージーに同行して田舎に帰り、ウェスタン家の本宅で暮らすようになる。トムはソファイアとの結婚生活とオールワージーとの日常的な交わりのお蔭で分別もついていく。また夫婦は心から愛し合い、その愛情はお互いの親愛の情と尊敬の念によって日増しに深まっていったという。そして、作品の最後は「隣人も小作人も召使いも誰一人として、ジョウンズ氏が愛しいソファイアと結婚した日を心からの感謝とともに祝福しない者はいないのである」という一文で締め括られる。

本論は、下関市立大学平成15年度秋学期の「外国文学」の授業で、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』を翻訳で読みながら、同作品における恋愛と結婚について話した内容をもとにしている。半年間の授業では十分に話せなかったため、本論の執筆はそれを補うつもりもある。従って、学生にも読みやすいように、作品からの引用は全て日本語にした。ただ、授業で使った岩波文庫の朱牟田夏雄訳は、論の展開上、一部の訳語が使えなかったため、残念ながら拙訳に改めた（引用箇所の括弧内のローマ数字は巻を、アラビア数字は章を示す）。

本論で主に使用した作品のテキストは Henry Fielding, *Tom Jones*, ed. Sheridan Baker (New York: W. W. Norton & Company, 1995) であるが、それ以外に Wesleyan や Penguin などの版も参考にしている。本論では、ときどきテキスト中の語句を英語で示すが、それは全て Norton 版（以下 Norton *Tom Jones*）による。同版の末尾には『トム・ジョウンズ』に関する標準的な批評が載っているため、そこにある論文に言及する場合はこの版の頁を示す。

(1) この事件については沢山の言及があるが、一番詳しく扱っているのは、Bernard Harrison, *Henry Fielding's Tom Jones: Novelist as Moral Philosopher* (Sussex University Press, 1975), 28 ff. 彼は、「鳥を追ってあの木に登ったジョウンズ君が水に落ちた時、鳥はまた飛び立って」というブリフィルの言葉は、小鳥が鷹にさらわれた責任をトムになすりつけている、というような読み方をしている。Hatfield は、小鳥を鷹にさらわせることによって、ブリフィルの小鳥を自由にやるという理屈を作者が退けていると言う (Glenn W. Hatfield, *Henry Fielding and the Language of Irony*, [Chicago and London: Univ. of Chicago Press, 1965] 183)。

トムは小鳥トミーが逃げたのを忘恩行為と考えると鳥の悲運に同情しないが、それはトム自身がオールワージーに対する忘恩ゆえに家を追われ、終には絞首刑に処せられ命を失いかねない状況になることを

暗示するという見方もある (Maaja A. Stewart, "Ingratitude in *Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 751)。本論では、恋愛との関係で感謝の重要性も指摘しているが、本作品ではその反対の忘恩もまた問題になっているのは確かである。

Gardiner は、ブリフィルを「読み手」「書き手」「批評家」などになぞらえて、この小事件の意味を考える (Ellen Gardiner, *Regulating Readers: Gender and Literary Criticism in the Eighteenth-Century Novel* [Newark: Univ. of Delaware Press, 1999], 75)。

この事件は財産法の問題を扱っているという見方もある (Simon Stern, "Tom Jones and Economies of Copyright," *Eighteenth-Century Fiction* 9/4 [1997]: 443)。

- (2) 小鳥が鷹にさらわれたというのは稀代の嘘吐きであるブリフィルの作り話の可能性も十分ある。
- (3) 小鳥が鷹にさらわれたというのが事実だとしても、それをソファイアに告げるのはこの件と重なる部分がある。ブリフィルは瀕死の状態と思われる伯父に医師の反対を押し切って母の死を知らせるが、これは、どういうときでも本当のことを知らせるように伯父に言われたという彼の弁明にも拘わらず、実は母の死とトムが兄であるという知らせと一緒に受け取ったばかりのブリフィルが、トムの出生の秘密が伯父に知れ、財産がトムに渡るのを恐れ、伯父にショックを与えて死期を早めようとしたと考えるのが一般的である (Anthony J. Hassall, *Fielding's Tom Jones* [Sydney Univ. Press, 1979], 28; Jo Alison Parker, *The Author's Inheritance: Henry Fielding, Jane Austen, and the Establishment of the Novel* [DeKalb: Northern Illinois Univ. Press, 1998], 73; Patrick Reilly, *Tom Jones: Adventure and Providence* [Boston: Twayne Publishers, 1991], 45, 50, 52; Richard J. Dircks, *Henry Fielding* [Boston: Twayne Publishers, 1983], 99)。
- (4) 「ブラック」はジョージの腹黒さを暗示するが、同時に彼は何度も他人の猟園を荒らすので、その猟園に関する1723年のWaltham Black Act (The Black Act)の"Black"とも関係があるという (Martin A. Kayman, "The 'New Sort of Specialty' and the 'New Province of Writing': Banknotes, Fiction and the Law in *Tom Jones*," *ELH* 68 (2001): 643-44; Stewart, 762)。
- (5) マフは女性性器及び陰毛を意味していたと指摘される (Gerald J. Butler, *Fielding's Unruly Novels* [Lewiston: Edwin Mellen Press, 1995], 79; Jones DeRitter, "How Came This Muff Here?: A Note on *Tom Jones*," *English Language Notes* 26/4 [1989]: 42)。Eric Partridgeの *A Dictionary of*

Slang の定義にも確かに “muff, n. The female pudend [sic], outwardly” とある。

Leopold Damrosch, Jr. も、トムがマフに愛着を示すのは彼の性的欲望の表れだと指摘する (Leopold Damrosch, Jr., *God's Plot and Man's Stories: Studies in the Fictional Imagination from Milton to Fielding* [Chicago & London: Univ. of Chicago Press, 1985], 279)。また、Leo Braudy も Maurice Johnson のマフに対する解釈に言及しながら、マフのこのような “imputed meaning” に触れている (Leo Braudy, *Narrative Form in History and Fiction: Hume, Fielding and Gibbon* [Princeton Univ. Press, 1970], 177)。

マフの問題をまとめて詳しく扱っているのは、Maurice Johnson, *Fielding's Art of Fiction: Eleven Essays on Shamela, Joseph Andrews, Tom Jones, and Amelia* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1965), 129-38。Johnson も “muff” の俗語としての性的意味合いに触れている (Johnson, 136)。また、マフがトムにとってソファイアの代わりであるように、ソファイアにとってマフはトムの代わりをしていると指摘する (Johnson, 133-34)。しかし、Schmidgen は、同じくマフの性的意味を指摘しながら、マフはソファイアの代理をするほどのフェティッシュにはなっていないという (Wolfram Schmidgen, *Eighteenth-Century Fiction and the Law of Property*, [Cambridge Univ. Press, 2002], 131-34)。

- (6) Hubert McDermott, *Novel and Romance: The Odyssey to Tom Jones* (Basingstoke: Macmillan, 1989), 219 参照。ウィル・バーンズの名が出た段階で、子供はお腹の中ではなく、既に生まれているという解釈もある (Michael Irwin, *Henry Fielding: The Tentative Realist* [Oxford: Clarendon Press, 1967], 106)。
- (7) Simon Varey, *Henry Fielding* (Cambridge Univ. Press, 1986), 98 参照。
- (8) トムのこのような言葉はあくまでも表向きの、きれいごとを言っているに過ぎないという見方もできる。そして、トムは抽象としてより、生身の女としてソファイアを求め、徳よりも裸の魅力に関心があるという Butler の主張も否定しがたい (Butler, 73 ff)。
- (9) このように親などが勝手に決めるのが arranged marriage であり、この種の結婚は往々にして結婚当事者の意思を無視した強制結婚 (forced marriage) になる。また arranged marriage は親の打算で決められる financial marriage でもある (Angela J. Smallwood, *Fielding and the Woman Question: The Novels of Henry Fielding and Feminist Debate 1700-1750* [Harvester Wheat-

sheaf, 1989], 56)。“arranged marriage” は普通「見合い結婚」と訳されるが、この場合は適訳とは言えない。

- (10) 『アミーリア』の中で、同じく内気で純朴なアトキンソンが愛しい人妻アミーリアと一緒に震えながら歩く場面が思い出される。
- (11) 殉教者的喜びを感じる場所はリチャードソンの『クラリッサ』(1748) のヒロインであるクラリッサの特性を皮肉っていると思われる。また、フェラマー卿によるソファイアの陵辱未遂は『パミラ』ではなく、『クラリッサ』を意識しているという説もある (Hassal, 89)。リチャードソンの作品のそれぞれをフィールディングの作品のそれぞれと対にすると、『クラリッサ』の方が『トム・ジョウンズ』と対になる (Aurélien Digeon, *The Novels of Henry Fielding* [New York: Russell & Russell, 1962], 129-194)。
- (12) 楽園館のある地を去るトムが楽園を出て行くアダムと対比されているのは、次のような表現にも明らかである。「世界はミルトンの文言のごとく、全て彼の前にあった。しかもジョウンズはアダムと同様、慰めあるいは助力を求めに行くべき相手がいない」(VII, 2)。

三人のブリフィルは皆、楽園に侵入した蛇だという見方がある (Eleanor N. Hutchens, “O Attic Shape! The Cornering of Square,” *Norton Tom Jones*, 770)。オールワージーがブリフィルのことを “wicked Viper” (XVIII, 8) と呼ぶのもこれと関係する (Christine van Boheemen, *The Novel as Family Romance: Language, Gender, and Authority from Fielding to Joyce* [Ithaca & London: Cornell Univ. Press, 1987], 73-74; Varey, 99)。また、この表現はキリストがパリサイ人を非難する時に用いた言葉だという指摘もある (Reilly, 45)。

オールワージーがトムを追放した主な理由が、彼自身に対するトムの不敬・忘恩だとすると——この見方が一般的——、オールワージーは度量の狭い自己中心的な人物に思えてくる (John Preston, *The Created Self: The Reader's Role in Eighteenth-Century Fiction* [London: Heinemann, 1970], 127 参照)。

- (13) W. A. Speck, *Society and Literature in England 1700-60* (Gill and Macmillan, 1983), 105-106 参照。
- (14) Varey, 90 参照。
- (15) 地主ウェスタンがソファイアを、そしてフィッツパトリックが妻を追うだけではなく、作品には他にもいくつかの追跡が見られるが、この追跡のモチーフは喜劇的筋立ての基本であると Preston は Ghent の説に触れながら言う (John Preston, “Plot

- as Irony: The Reader's Role," Norton *Tom Jones*, 76; Dorothy van Ghent, *The English Novel: Form and Function* [New York: Rinehart & Company, 1953], 72-73)。
- (16) Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art: A Study of Joseph Andrews* (Middletown: Wesleyan University Press, 1959), 26.
- (17) 語り手の表現：「それから、彼は彼女を両腕に抱えた。すると、彼女は大声で叫んだ。……ただ彼女の首にまいたハンカチが乱れて、彼の無礼な唇が彼女の美しい首に乱暴を働いただけであった」(XV-5)；ソファイアの言葉：「彼は私を両腕に抱えて、長椅子の上にひき倒して、片手を私の胸につっこんで、そこにとても乱暴にキスをなさったので今でも左の胸にそのあとが残っています」(XVII-4)。
- (18) Dirck, 97参照。Shesgreenは、ブービー夫人がより年を重ね、色事の経験を積み重ね、何のためらいも見せなくなったような存在がベラストン夫人だと言う (Sean Shesgreen, *Literary Portraits in the Novels of Henry Fielding* [Northern Illinois Univ. Press, 1972], 144)。
- (19) これは物語の終盤のペースが速まっている一つの表れという見方もある (J. Paul Hunter, *Occasional Form: Henry Fielding and the Chains of Circumstance* [Baltimore & London: John Hopkins Univ. Press, 1975], 189-90)。
- (20) Muriel Britain Williams, *Marriage: Fielding's Mirror of Morality* (University of Alabama Press, 1973), 89.
- (21) 他者との関わりにおいて人物を評価し、他者である女性とは性的関係がなく、自慰をしていて用を済ませている、他者に対する同情心を欠いたブリフィルよりも、女性関係にはだらしないけれども他者に同情の心を持つトムの方がましだという捉え方がある (Reilly, 72)。
- ブリフィルが自慰をしているというのは、彼に関する「彼の性的欲望は生まれつき余り強烈ではなかったので、哲学あるいは勉学、あるいは何か他の方法によって簡単に鎮めることができた」(VI-4) という表現のうちの「他の方法」が手淫を暗示していると捉えるから (Reilly, 114)。Parkerもブリフィルの手淫について触れて、それは彼の自己愛を表しており、一方、トムの性的乱脈行為は彼の肉体的及び社会的健全さを表すという (Parker, 71-72)。他に Frederick R. Karl, *The Adversary Literature: The English Novel in the Eighteenth Century* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1974), 166-67参照。
- (22) このような見方は既に John Middleton Murry の論にも認められる (Butler, 95-96)。このような

女性の側の積極性とかトムの受動性については、他に Irwin, 91; Morris Golden, *Fielding's Moral Psychology* (Univ. of Massachusetts Press, 1966), 56-57; Hassal, 59, 93; Frederick W. Hilles, "Art and Artifice in *Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 791; April London, "Controlling the Text: Women in *Tom Jones*," *Critical Essays on Henry Fielding*, ed. Albert J. Rivero (New York: G. K. Hall & Co., 1998), 136-37; Andrew Wright, *Henry Fielding: Mask and Feast* (London: Chatto & Windus, 1968), 90; Jenny Uglow, *Henry Fielding* (Northcotehouse, 1995), 60; William Empson, "*Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 716; Gardiner, 79 などがある。

- 最近では、Rawsonがトムの受動性に注目して、トムは "adventurer" の側面は希薄で、バイロンの描くドン・ジュアンと共通性があると述べる (Claude Rawson, "Thoughts on Adventurers: Fielding to Byron," *Eighteenth-Century Genre and Culture: Serious Reflections on Occasional Forms*, ed. Dennis Todd and Cynthia Wall [Newark: Univ. of Delaware Press, 2001], 137-38)。
- (23) Williams, 82; Dorothy Van Ghent, "On *Tom Jones*," *Henry Fielding: Tom Jones*, ed. Neil Compton [Macmillan, 1970], 61. Pagliaroはトムのベラストン夫人以外との性的関係は彼の肉体的、社会的健全性を表すという (Harold Pagliaro, *Henry Fielding: A Literary Life* [New York: St. Martin Press, 1998], 165)。J. Middleton Murryはベラストン夫人との関係も肯定的に捉えている (J. Middleton Murry, "In Defence of Fielding (1956)," *Henry Fielding: Tom Jones*, ed. Neil Compton [Macmillan, 1970], 84)。
- (24) 牢屋に於けるウォーターズ夫人の誘惑は他の場合ほど明瞭ではないが、彼女の訪問の真意は何かと考えると、フィッツパトリックの命に別状はないという朗報を彼にもたらすためではなく、再度誘惑するつもりであったと想像できる。トムが拒絶する誘惑の回数を三回とする者が多いが (Williams, 82; Hassall, 94; Reilly, 47; Empson, 725; Eileen Jacques, "Fielding's *Tom Jones* and the Nicomachean Ethics," *English Language Notes* 30/1 [1992]: 24), R. S. Craneは、トムの道徳的変化をもたらしたものとして、ベラストン夫人との決別、ハント夫人の結婚申し込みの辞退、そしてフィッツパトリック夫人からの求婚の拒絶の三つの経験を挙げるのみである (R. S. Crane, "The Plot of *Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 688)。『トム・ジョーンズ』は大きく三つの部分 (田舎・道中・ロンドン) からなるが、トムはその各々の部分で一人ずつ、計三人の女性の誘惑に屈して関係する

が、その後、同じ回数だけ誘惑を退けるので、そういう点で対称性が認められる (Hassall, 94)。Goldknopf は「誘惑」ではなく「追跡」という概念を用いて、トムは女性を追うのではなく追いかけて三人と関係すると言う (David Goldknopf, *The Life of the Novel* [Chicago & London: Univ. of Chicago Press, 1972], 131-134)。三人の女性との関係は、作者が意識していたと思われるフェヌロンの『テレマックの冒険』の主人公の場合と一致するし、三人の誘惑は福音書に於ける三度の誘惑にも対応するという指摘もある (Hunter, 135, 188)。また、このような作品に於ける数字などの対称性については、Douglas Brooks, *Number and Pattern in the Eighteenth-Century Novel: Defoe, Fielding, Smollett and Sterne* (London & Boston: Routledge & Kegan Paul, 1973), 92-122に詳しい。

(25) Williams, 88-89; Uglow, 66.

フィールディングの理想とする男女関係は、友愛は勿論、愛情と燃えるような性的欲情を含むものだという考えもある (Smallwood, 56)。

ソファイアのトムに対する愛の方が彼女の傷ついた自尊心よりも強かったという捉え方や (Crane, 689)、彼女が許すなら他者が目くじらを立てることもないという捉え方もある (Reilly, 77)。Reillyのように、『トム・ジョウンズ』のテーマをキリストの教えに徹底的に重ねる読み方をすれば、ソファイアが悔い改めたトムを許すのはごく自然なことと言えよう。トムを「放蕩息子」の系譜に入れる見方もあるが、その場合、トムを許して再び家に迎え入れるのは養父のオールワージーだと見るのが普通であろうが、本当に許されなければならないのは、トムを誤解して邸から放逐したオールワージーの方だとすると、トムを許して迎え入れるのはむしろソファイアだという読み方もできる。ソファイアが突然態度を変えるのは、リアリティを損なってはいるが、喜劇的効果を生むための常套だという指摘もある (Ian Watt, "Fielding as Novelist: *Tom Jones*," *Modern Critical Interpretation*, ed. Harold Bloom [Chelsea House Publishers, 1987], 20)。

(26) Boheemen はソファイアが "prudence" を表すのに対して、モリーやウォーターズ夫人は "Fortune" を表すという (Boheemen, 83-84)。そしてウォーターズ夫人を Fortune の権化のように見るが (Boheemen, 84)、これに対しウェスタン女史が『トム・ジョウンズ』に登場する大勢の Fortune 的女性の中でもその代表格だという見方もある (Betty Rizzo, "The Gendering of Divinity in *Tom Jones*," *Studies in Eighteenth-Century* 24 [1995]: 265-66)。このように "sophia" と "prudence" を同一視する代表者が Battestin や Hatfield であるのに対し (Martin C. Battestin, "Fielding's

Definition of Wisdom," *ELH* 35 (1968): 188-217; Hatfield, Chapter 5), Kinkead-Weekes は、『トム・ジョウンズ』の作者が表そうとする "sophia" は "prudence" などとは異なり、心や愛とつながる "sancta Sophia", または "Loving Wisdom" であると言う (Mark Kinkead-Weekes, "Out of the Thicket in *Tom Jones*," *Henry Fielding: Justice Observed*, ed. K. G. Simpson [Vision and Barnes & Noble, 1985], 147-48)。単なる知恵ではなく愛とつながった知恵という見方が、本論の観点からもこれは興味深い。

(27) 恋愛の帰結としての結婚に拘るのはイギリス小説の特徴だという (Jennie Wang, *Novelistic Love in the Platonic Tradition* [Rowman & Littlefield Publishers, 1997], 68)。子供の出生について言えば、子供が恋愛結婚で生まれて親に愛されるのが理想とすれば、トムは私生児だが愛ゆえに生まれて実の母に愛されるけれど、ブリフィルは正式ではあるが愛のない結婚によって生まれて母親に愛されないという、ねじれた関係がある (Wolfram Schmidgen, "Illegitimacy and Social Observation: The Bastard in the Eighteenth-Century Novel," *ELH* 69 [2002]: 146; Goldknopf, 139; Wright, 77)。また『トム・ジョウンズ』には父と母と子のそろった家庭はほとんど出てこない (Goldknopf, 128-29)。

(28) 『トム・ジョウンズ』に於ける「後日談」とは対照的に、『アミーリア』における「後日談」では、主人公達に仇をなした連中は、それぞれ相応の報いを受ける。例えば、アミーリアを好色の餌食にしようとした Noble Lord などは性病で体がぼろぼろになり、死んで埋葬された後も悪臭を放ったという (Parker, 149 参照)。